

# 史跡松江城の発掘調査(2)

## —北惣門橋跡、御廊下橋跡—

岡崎雄二郎

### I. 北惣門橋跡の発掘調査

#### 1. 調査に至る経緯

松江城は城下町松江のシンボルであることから、市民や来訪者に対し一層の理解と活用を図るため、平成4年度から同6年度にかけて、自治省所管の地域づくり推進事業の一つ「史跡松江城公園周辺整備事業」として様々な整備事業を実施した。

この内、松江城の東側の内堀に架かっていた眼鏡橋は、近代の石造アーチ橋であり、松江城の歴史的景観にふさわしくないことと、停滞していた堀川の通水性を高める必要があったことから、従来の眼鏡橋を解体撤去し、橋下の発掘調査を実施し、その成果に基づき江戸時代にあった木橋「北惣門橋」に復元架橋することになった。現地調査は、平成5年10月18日から着手し、同年11月16日まで行なった<sup>(1)</sup>。

#### 2. 北惣門橋の変遷

北惣門橋は、『堀尾期松江城下町絵図』（1620～1633：島根大学附属図書館蔵）に見られるように、松江城の築城と同時に城の脇（横）から出入りする道筋の内堀に架かる橋として建造された。「出雲国松江城絵図」

（1644～1648：国立公文書館蔵）には、反りを持った太鼓橋として描かれている。今の大手前から入ったところの南惣門（大手御門ともいう）に対して、北惣門（東惣門、脇虎口之門ともいう）に渡る橋だったことから北惣門橋と呼ばれていた。

又、宝暦年間に編纂された「雲陽大数録」（『松江市史』史料編「近世I」）によれば、北惣門橋は、「長九間四尺五寸、幅貳間」と記されている。これを一間（六尺三寸）＝1.91mで換算すると全長18.54m、幅3.82

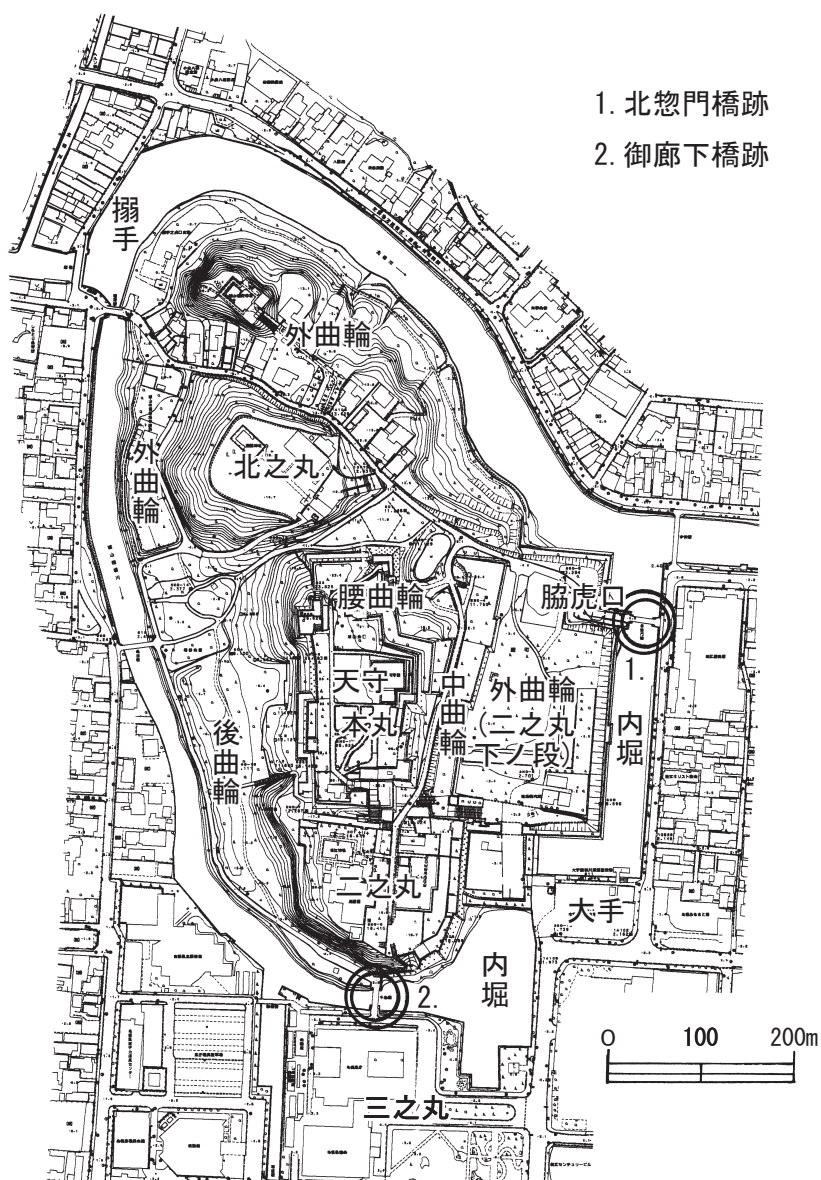


図1 発掘調査位置図

mとなる<sup>(2)</sup>。降って明治初期に陸軍省が作成した「松江城測量図」(国立国会図書館蔵)<sup>(3)</sup>や明治22年6月作成の「道路取調図(1区殿町)」(松江市蔵)には江戸時代の長さのままの橋が描かれている。しかし、明治35年度調製の「松江市道路水路図(内中原)」(松江市蔵)では短い橋に変わっている。おそらく、この間に長い木橋から短い石造りのアーチ橋(通称眼鏡橋)に架け替えられたものと思われる<sup>(4)</sup>。

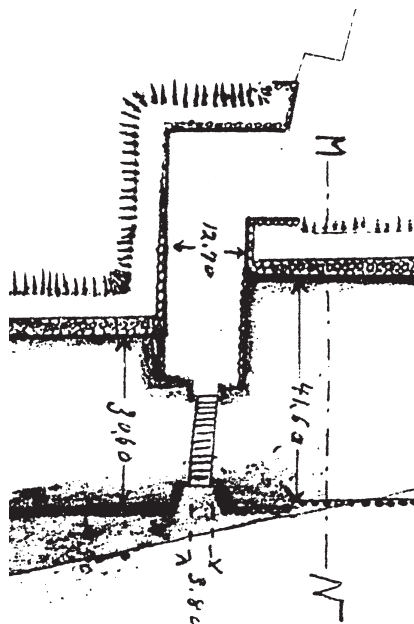


図2 明治初期、陸軍省作成の「松江城測量図」に見える北惣門橋

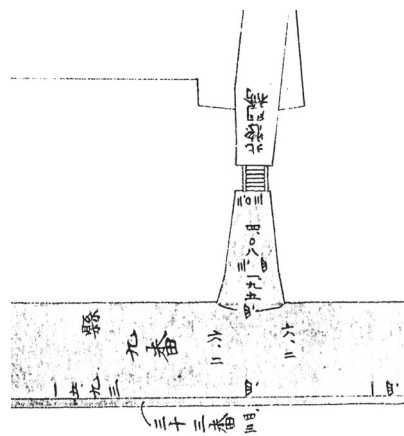


図3 明治35年の松江市道路図に見える北惣門橋

### 3. 調査の概要

#### (1) 眼鏡橋及び取付部の解体撤去

大型重機により眼鏡橋の石造アーチ及び両側の取付部(土橋)を注意深く基礎盛土下まで解体撤去した。アーチは、凝灰質砂岩(通称来待石)製で根石を2段積みにした上に、片側11個ずつ積み上げ、中央部にくさびとなる石を挟んで形づくる。根石の外方に接して一辺15cmの角材の上部に幅6cm、深さ3cmの溝を彫り込んだ木樋が埋設されていた。



眼鏡橋旧景

アーチの基礎の最下部は、直径20~30cmの丸太木が2本ずつ組み合わされて南北に通してあり、それを直径20~30cmの縦杭が支えている。さらに、この丸太木に直交して3本の丸太木が組み合わせてあり、北東部では多数並列させて平場を作り、側部石垣根石の基礎となる2本組みの丸太材に接続している。2本組みの丸太材は南側の石垣下にも同様に敷いていた。

## (2) 橋脚部基礎の調査

江戸時代の胴木2本、それを支える支柱8本、単独の柱6本を検出した。

### ① 東側の胴木と支柱

胴木は南北方向に据えられ、長さ4.15m、厚み27～29cm前後の松材である。胴木を支える支柱（縦杭）は5本あり、内4本は黒色で直径30cm前後のもの、1本は黄褐色で22.3cmあった。胴木には長方形のホゾ穴が計5ヶ所あり、中央部に1ヶ所、南部と北部にそれぞれ2ヶ所あった。いずれも長さ17～21cm、幅9.10cm、深さ1.5～6cmを測る。黒色柱が黄褐色柱に比べてより古い段階のものと考えられる。

又、中央の支柱にのる胴木は、長さ45cm、奥行き最大15cmの範囲で丸く削り込まれ、支柱をはめこんでいる。胴木は東部をわずかに残して、大半虫食い痕が認められる。

### ② 西側の胴木と支柱

胴木は、南北方向に据えられ、長さ4.25m、直径21～32cmの松材である。中央部に1ヶ所、南部と北部にそれぞれ2ヶ所ずつの長方形のホゾ穴が彫り込まれている。

支柱は、直径30cm前後のもので、黄褐色と黒色を呈するものの2種が認められた。ホゾ穴は長さ18.9cm、幅5.5～9cm、深さ3.5～4.5cmを測る。

東側の胴木と同様の配列である。支柱はそれぞれホゾ穴の直下付近にあるが、中央の支柱は炭化し黒色を呈し、中心が胴木から東へはみ出している。北側の支柱は高さ、幅共8cmのホゾを作り、胴木にうまく組み込まれている。黒色柱が黄色柱に比べて古い段階のものと考えられる。西側と東側の胴木の間隔はおよそ7mを測る。



胴木検出状況（全景）



東側の胴木北端部と支柱

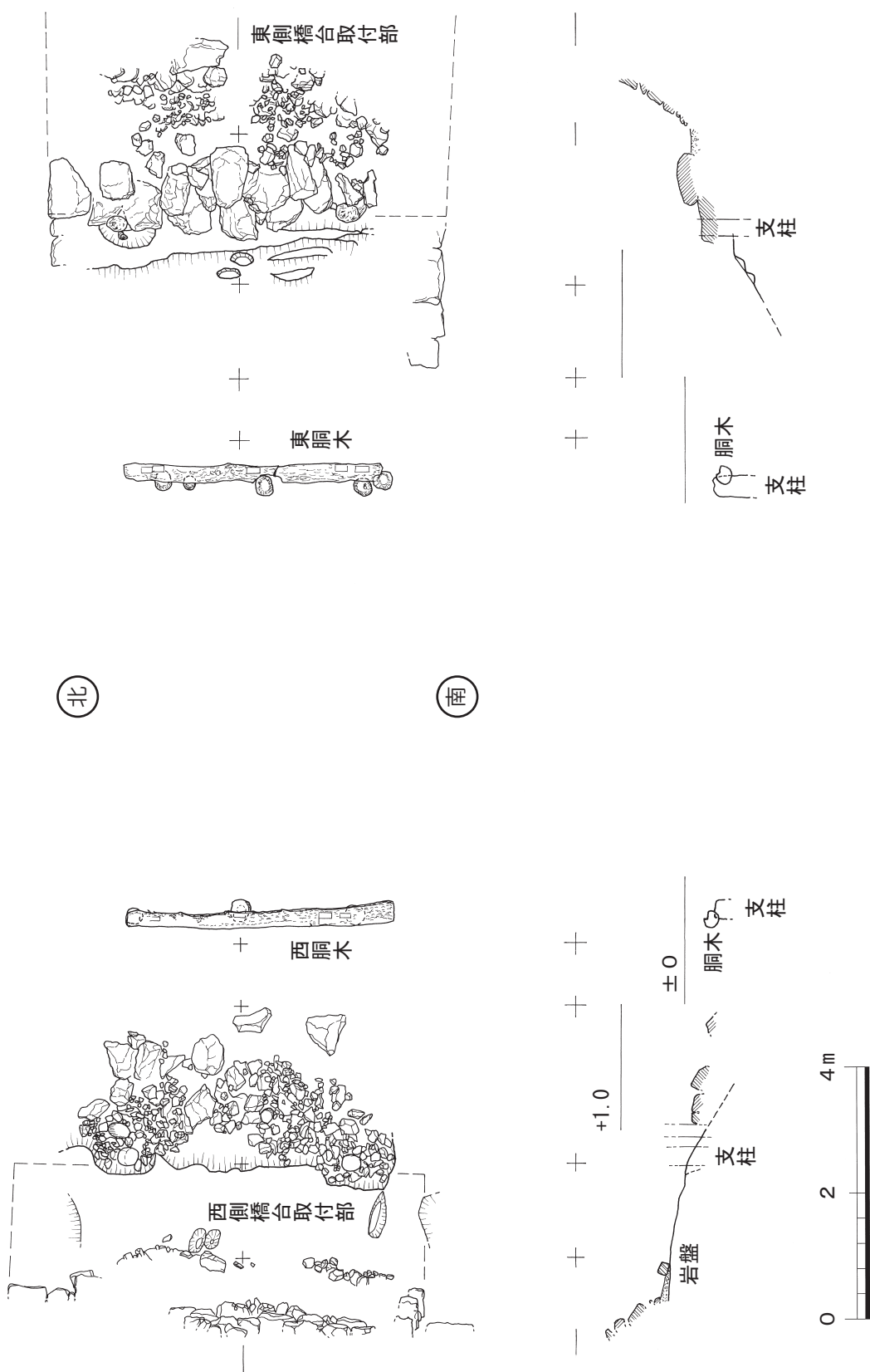


图 4 北惣門橋跡発掘調査成果図

### (3) 橋台取付部の調査

#### ① 東側橋台取付部

東側胴木から約3.9m東で50×100cm前後の大石が南北方向に列をなして据えられていた。

その背後の約40cm後ろ(家老屋敷跡側)にもう1列大石が並んでいた。大石の前端には南と北の2か所に径30cm前後の大杭が岩盤の青色ナメラ層(軟砂岩層)に打ち込んであり、周囲には掘り方が確認できた。南北の芯々距離は約3.8mを測る。大石が前方に押し出されないよう抑えの機能を持つものであろう。大石の背後は約40cmの間隔をおいて直径20～40cmの割り石が積み上げられ、その高さは1mを測る。



東側橋台 根石

大石の前内堀側は約29度の角度で、地元で青ナメラと呼ばれる岩盤(青灰色軟砂岩)が急傾斜している。橋下の堀の掘削作業のための足掛かりと思われる窪み2ヶ所(38×18、36×22cm)や平坦面2ヶ所も確認できる。江戸時代の橋台部は、大石からその後方の割石積までの間に設けられたものと考えられる。

#### ② 西側橋台取付部

西側胴木から約3.9m西で大杭が南北に1本ずつ検出された。北の大杭は黄褐色を呈する。南の大杭との芯々距離は約3.7mを測る。北の大杭の東北東には20cm離れて炭化して黒色を呈する別の杭がある。中央部にも炭化し黒色を呈する杭がある。北の黒色杭と対をなし、その芯々距離は約2.3mを測る。杭には径20cm前後のものと径30cm前後のものの2種がある。

これらの杭周囲から東にかけて岩盤が切削され、約17度の角度で緩やかに傾斜していく。この緩傾斜面には東西2.5m、南北5mの範囲に多数の礫、転石を捨てて地盤を固めている。比較的東側により大きな石を置いている。

一方これらの杭の西方(城山側)は、岩盤が緩やかに立ち上がり、約1.5m西の位置に南北幅4.5mの範囲で直径10～20cmの石が集中していた。

さらに80cm西方では、南北両側の現存石垣と連続する石垣が市道直下で検出されたが、上半部は全く遺存しておらず、一部褐色土も混入しており、眼鏡橋の土橋構築時に攪乱を受けた可能性が高い。江戸時代の橋台は、大杭からこの石垣列までの間に設けられたものと考えられる。

## 4. 出土遺物の検討

### (1) 陶磁器の変遷について

図5-1～10は肥前系磁器である。5-1は九陶Ⅱ-2期からⅢ期の染付中瓶である。5-2は九陶Ⅲ期の網目文染付瓶である。5-3～5は染付の小杯、小碗、五寸皿で九陶Ⅳ期にあたる。5-6～10は中碗、中皿、大皿や御神酒徳利で九陶Ⅴ期のものである。5-11の<sup>ひょうそく</sup>秉燭、5-13の土瓶は、いずれも18世紀後半以降の京都・信楽系の陶器と思われる。5-12は在地の<sup>ふじな</sup>布志名焼の高坏で幕末以降のものと考えられる。5-14は19世紀初頭から幕末にかけての再興九谷焼で高台が二重に廻るものである。以上のように、17世紀前半にあたる陶磁器はわずかで、18世紀代から19世紀代のものが主として出土している<sup>(5)</sup>。

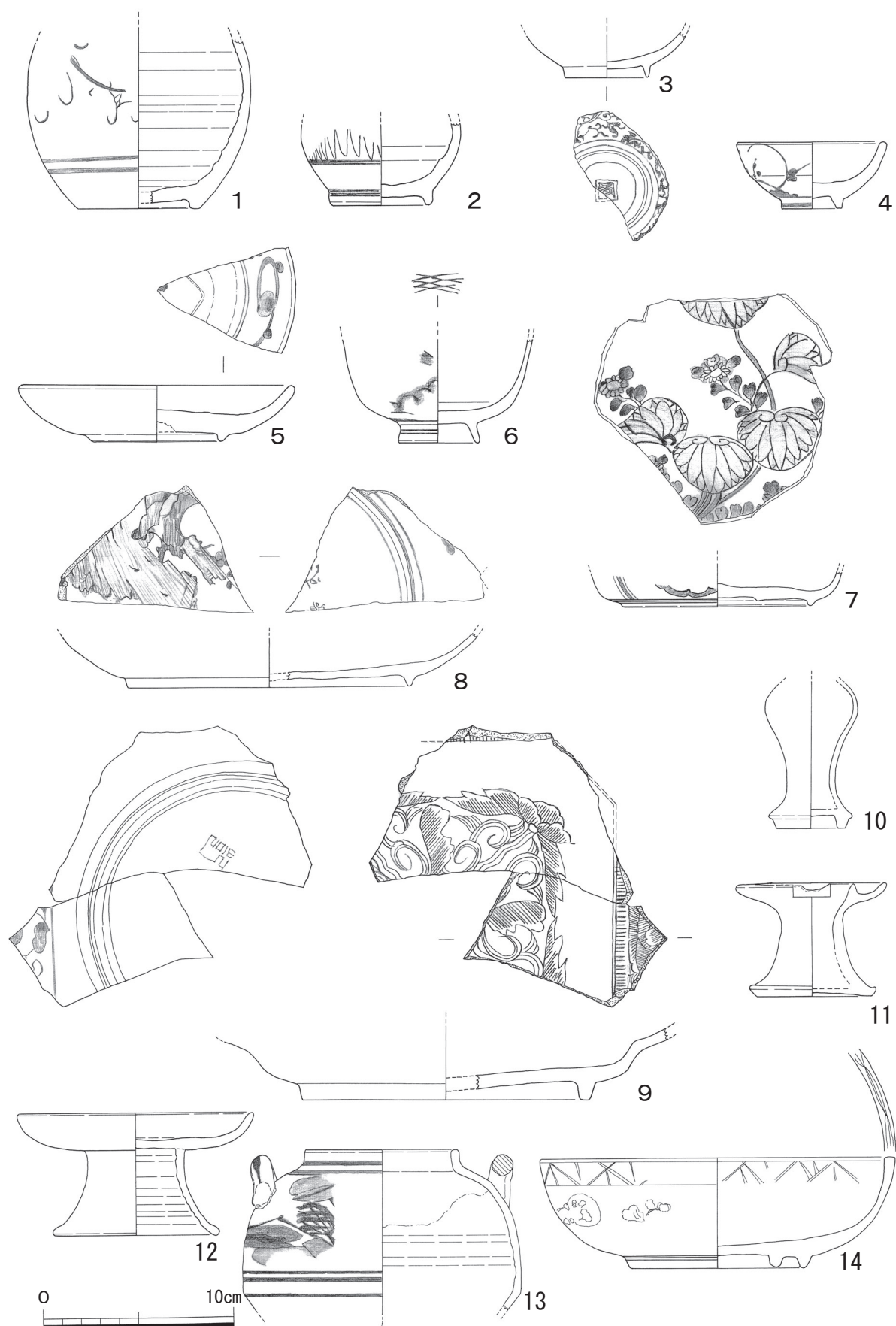


图5 出土陶磁器実測図

## (2) 分銅紋の刻印のある軒丸瓦について

東側の胴木付近から出土した。瓦当面は接合部から剥落している。内面には布目痕を残す。外面円孔の横に長さ2.3cm、最大幅2.1cm、くびれ部幅0.6cmの分銅紋を押す。分銅紋は、堀尾氏の家紋の一つである。刻印瓦の類例は松江城内では二之丸中櫓跡から軒平瓦が、外曲輪（二之丸下ノ段）から軒丸瓦の丸瓦部のものの計2例、昭和25～30年に実施された天守の解体修理工事の際にも数例発見されているが数少ないものである。松江城築城期に焼成された瓦と考えられる。

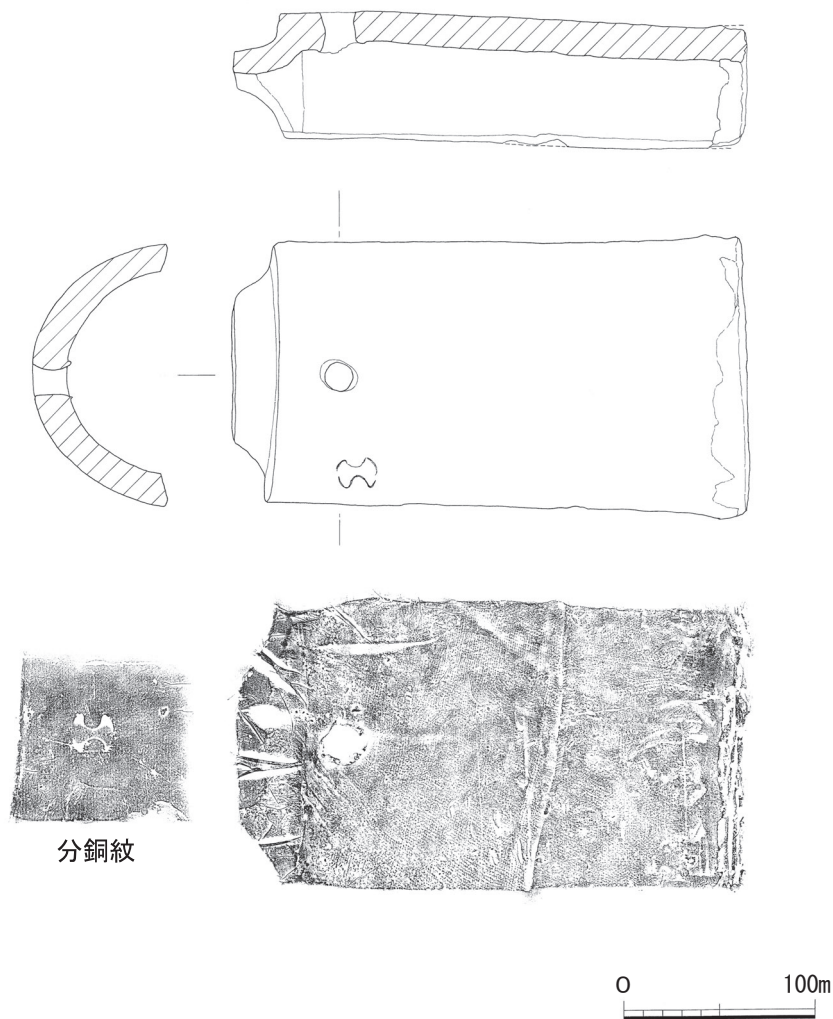


図6 軒丸瓦実測図



分銅紋の刻印のある軒丸瓦

### (3) 鯰瓦について

橋下から鯰瓦の胴部の破片が出土した。素地は非常に精選された灰色の粘土で、瓦と同じ焼きである。外面にはヘラで鱗紋を描き、銀色の光沢がある。鱗の単位は縦2.0～2.4cm、横幅2.7～3.5cm、深さ1.5～2mmを測る。上方に向かって大きくなり、かつ断面が角張っていく傾向がある。絵図・文献資料によれば、北惣門橋から城内へ約10m入ったところに、「北惣門」或いは「脇虎口之門」と呼ばれた二階造りの櫓門があった。棟の両端には、鯰が取り付けてあったことが絵図から分かるので、この出土品は北惣門のものであったことが考えられる。松江城関係の鯰瓦の出土例は、本丸弓櫓跡付近、二之丸中櫓跡付近、同太鼓櫓跡、大手門跡付近から出土している。

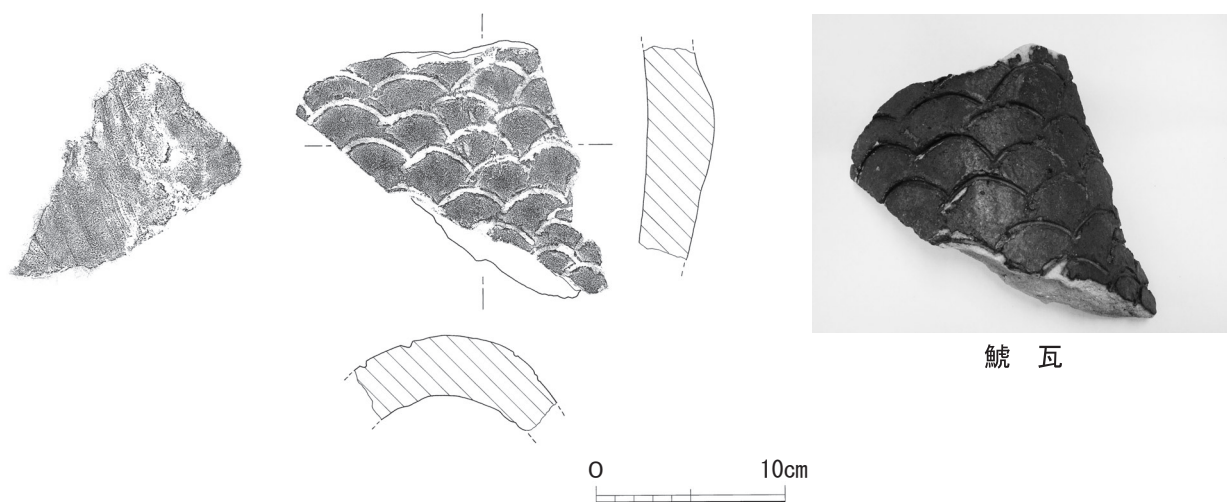


図7 鯰瓦実測図

## 5. 北惣門橋の復元

### (1) 調査成果を基にした復元イメージ

胴木は長さ約4m余の皮をとった松材で、約7mの間隔をおいて東西に2本検出された。それぞれ北端部、中央部、南端部に長方形のホゾ穴が穿たれており、そこから橋脚本体が立ち上がっていたことが分かった。従って、橋脚は7mの間隔をあけて2列あり、各列3本建てであったことが知られる。

橋台部は、東側、西側共攪乱を受けており、不明瞭であったが、胴木から外方へ約4mの間隔をおいて出張部の石垣の根石とその前端に大杭が検出された。東側橋台部（家老屋敷跡側）では南北方向に約3.8mの間隔をあけて2本、西側橋台部（北惣門跡側）では4本検出され、この内両端の2本は南北方向に約3.6mの間隔があった。これは、各橋台部の先端の根石がずれないように、根固めする機能があるものと考えられた。従って、橋台部は、これら大杭より外方にあったものと推定した。

### (2) 復元の基本方針

#### ① 橋脚列は2列、橋脚本数は各列3本建てとする

発掘調査の結果、約7mの間隔をあけて2か所、3本建ての橋脚であること及び江戸末期（天保年間頃）の様子を描いた『松江城郭図』や『出雲国松江城図』とも符合することに基づいた。

#### ② 主要寸法は長さ18.54m、幅3.82mとする

宝暦年間（1751～1762）に著された松江藩の統計書『雲陽大数録』に記載されている「長さ九間四尺五寸、幅貳間」という数値及び明治初期に陸軍省が実測した『松江城測量図』に記載されている橋

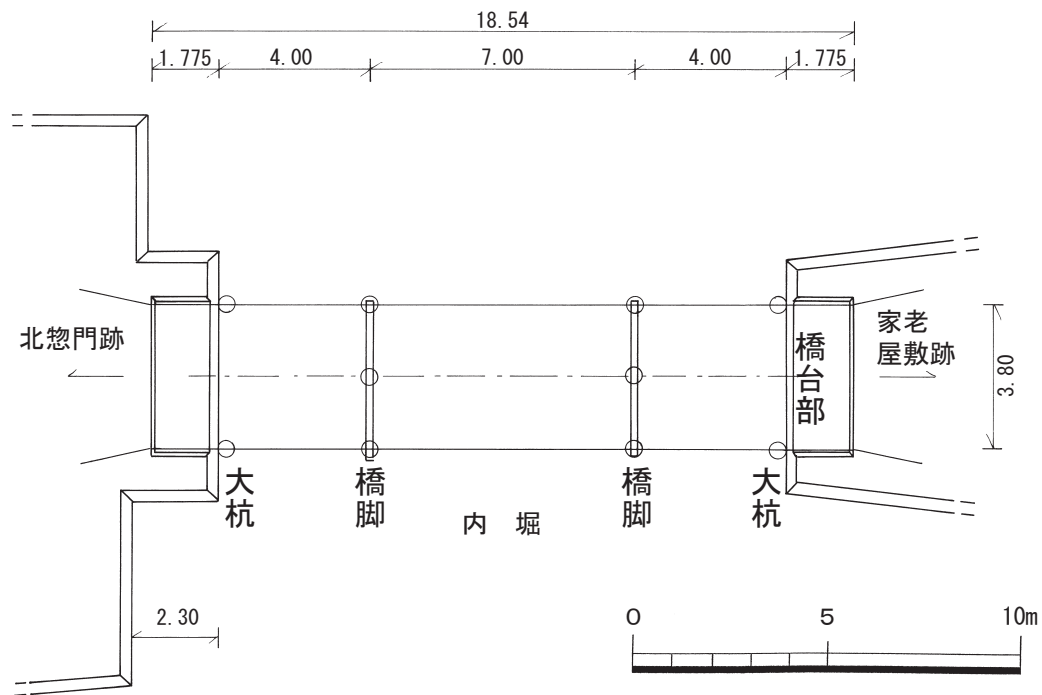


図8 北惣門橋復元基本寸法図

幅3.80mを根拠にして一間＝六尺三寸＝1.91mを基準尺度として計算した。

③ 反り橋とする

上記『松江城郭図』、『出雲国松江城図』に太鼓橋として表現されていることに基づき、反り上がりについては明治時代末期の北堀橋の古写真を参考とした。

④ 擬宝珠高欄は8本とする

『出雲国松江城図』の高欄基部親柱と袖部柱に4本ずつ計8本表現されていることに基づいた。

⑤ 梁の屋根を付ける

正徳五年（1715）作図の『京橋絵図』を参考とした。

(3) 復元工事の概要

- ・調査の成果に基づき、復元設計を財団法人文化財建造物保存技術協会で行い、文化庁の現状変更（復元）の許可が下りたので平成6年4月23日に復元工事に着手し、同年11月30日に木橋「北惣門橋」として竣工した。
- ・発掘調査で確認された江戸時代の柱盤（胴木）と木杭は原状保存するため橋脚側は松杭と横矢板を打ち土砂の流出を止め、上面には真



復元された北惣門橋

砂土を敷き詰めて遺構を保護した。

- ・橋台石積工事は、発掘調査で解体した橋台及びその周辺の石積を周囲にならい築いた。
- ・橋材は、国産（青森県産）のヒバとし、古色塗りとした<sup>(6)</sup>。

## 6. まとめ

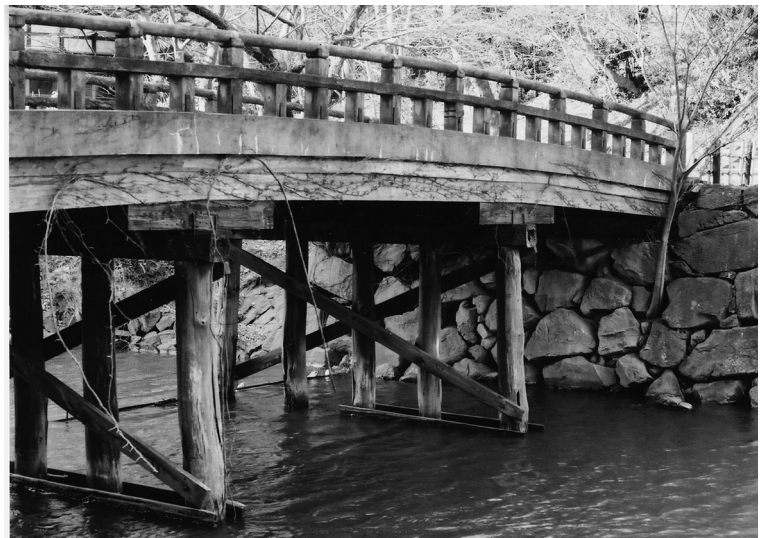
橋下部分の橋脚基礎構造の調査は、全国的に稀である。古くは和歌山城跡の一之橋<sup>(7)</sup>、最近では鳥取城跡の擬宝珠橋<sup>(8)</sup>の例がある。

今回、江戸時代の北惣門橋の橋脚を建てた胴木と支柱が検出され、長方形ホゾ孔の位置から2列3本建てであることが分かった。同年度に立会調査した「御廊下橋」跡でも胴木が確認されており、江戸時代の木橋の基本的な下部構造を知る上で大変貴重な資料となるものである。

## Ⅱ. 御廊下橋跡の立会調査

### 1. 調査に至る経緯

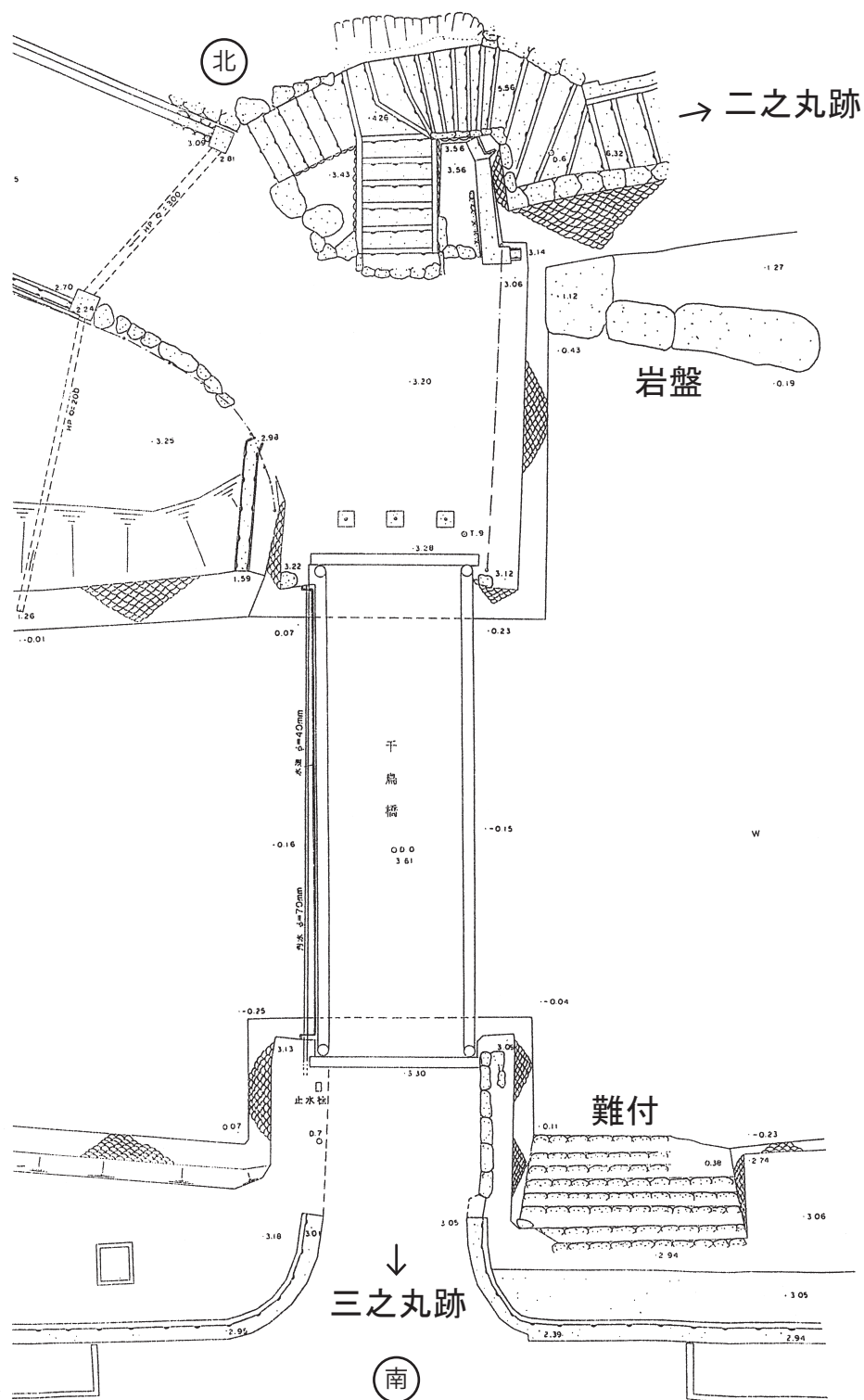
千鳥橋は、松江市殿町にある現島根県庁舎の北側、城山公園との間を東西に走る内堀に架かる木橋である。江戸時代には、亀田山に配置された本丸、二之丸などの主要城郭施設と藩主の居館である三之丸を連結する「御廊下橋」と呼ぶ重要な橋であった。『堀尾期松江城下町絵図』を見ると三之丸の正面、東の出入り口は堀を遮断した土橋、「御花畠」との北部の出入り口となる「助次橋」は通常の木橋だが、南方「三之丸内」、西方「御花畠」、北方「二之丸」との連絡は、築城当初から全て屋根付



北の橋台部を見る

の橋が架かっていたことが知られる。これは、藩主などが人目を気にせず、又風雨に会うことなく行きかうことを可能にするためであったと考えられる。

近代以降は、恐らく屋根のないごく普通の木橋ではなかったかと思われる。「千鳥橋」と呼称していた。平成5年度に至り、松江市では老朽化した千鳥橋を架け替えることになった。このため、工事中に橋下が排水され露出することから、解体直後を見計らって立会調査を行い、江戸時代の胴木など橋脚基礎の遺構や岩盤の状況の確認、遺物の採集を行うことになった。



現島根県庁舎

図9 千鳥橋旧状平面図

## 2. 史料に見える御廊下橋

### (1) 文献史料

17世紀末に成立した『竹内右兵衛書つけ』には記載がない。明和三年（1766）に書き写された『御城内惣間数』二之御丸の項によれば、「一 御廊下橋 壱間壱尺ニ六間五尺」とあり、1間＝六尺五寸＝1.97mで換算すれば幅約2.273m、長さ13.335mとなる<sup>(9)</sup>。

### (2) 絵図史料

17世紀前半に成立した「出雲国松江城絵図」（国立公文書館蔵）ほかのほとんどの松江城郭図には、屋根のかかった橋として描かれているので、江戸時代を通じて全体的な形状の変化は無いようである。17世紀末に成立した「松江城縄張図」（松江歴史館蔵）では「御廊下橋」と墨書された貼紙が貼ってあるが、橋本体の姿は描かれておらず寸法も記載されていない。その北に幅約3間、長さ7～9間の長方形の平地が表現されている。ここは、橋台部から二之丸へ上がる「御廊下」と呼称される石段下の踊り場である。東西と南側



「松江亀田千鳥城図」に見える御廊下橋

（今は剥落している）に石垣を表す紺色の紙とその内側に塀を表す薄茶色の紙が貼り付けてある。幕末の様子を描いたとされる「松江亀田千鳥城図」（松江歴史館蔵）によれば、橋脚は2列の3本建てとして描かれている。橋上には屋根が掛かり左右に板壁が取り付けられている。

## 3. 調査の概要

仮設工事で橋の両側は土のうで締め切られ、常に排水している状態であった。堆積していたヘドロやごみを除却し岩盤を確認すると共に、両側の橋台部に近い位置で橋の中軸線に直交した胴木が検出された。

### (1) 遺 構

#### ① 南側の胴木

南側の橋台取付部の石垣根石から約90～113cmの間隔をあけて、長さ4.04m、直径25～31cmの胴木が、石垣前端線と平行して検出された。胴木は松材と思われ、軟砂岩の岩盤の上に和久羅山デイサイト（通称おおみざき大海崎石）<sup>(10)</sup>の小石を諸所にかませて固定し、全体の樹皮を取り除いた丸太木の上面と下面を削平し、上部平坦面に墨で中軸線を引いて両端付近に長方形のホゾ穴を穿っている。ホゾ穴は、いずれも長さ18cm余、横幅6cm余、深さ6cm前後を測る。西側のホゾ穴の周囲は丸く黒ずんでいた。その範囲は径33cmで橋脚がこのホゾ穴にはめ込まれて立ち上がっていたものと推定される。東と西のホゾ穴の芯々距離は約3.4mである。西側ホゾ穴と胴木西端の間には、銚子が打ち込まれていた。胴木と橋脚を固定するためのものであろう。

又、西側ホゾ穴のある胴木の側面には、表面を薄く削り9つの文字が墨書されていた。文体は「廿式

間□□代四□□」と断続的に読める。胴木の切り出しか運搬時に書かれたのではないかとされるが、内容は不明である。

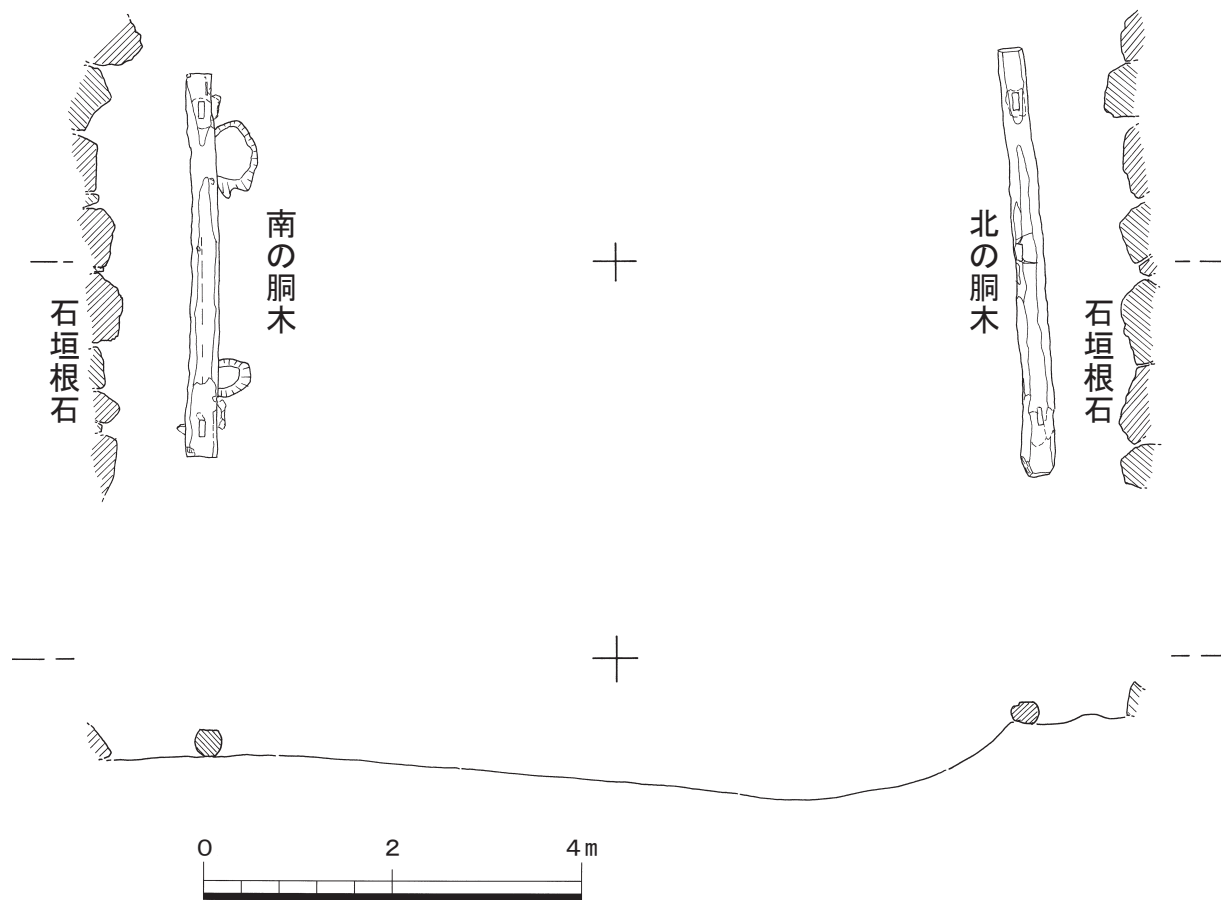


図10 胴木検出状況平面図・断面図



南の胴木

## ② 北側の胴木

北側の橋台取付部の石垣根石から85～95cmの間隔をあけて、長さ4.52m、直径20.5～33cmの胴木が石垣前端線とほぼ平行な形で検出された。胴木は松材と思われ、上面と下面を削平し、直接岩盤の上に固定されている。両端付近に長方形のホゾ穴を穿つ。ホゾ穴はいずれも長さ18cm余、横幅6cm前後、深さ5cm余を測る。東側のホゾ穴の周囲は直径35cmの範囲が丸く黒ずんでいた。橋脚がこのホゾ穴にはめ込まれて立っていたのだろう。西側の長方形ホゾ穴の周囲も径29×20cmの不定形な範囲が黒ずんでいた。又、こ



北の胴木

のホゾ穴の真下にも別のホゾ穴があった。向きが悪くて変更したのだろうか。東西の芯々距離は約3.36mである。岩盤はこの胴木の南側から急激に傾斜していく。北と南の胴木の芯々距離は、約8.7mである。

## ③ 石垣の刻印

南側（県庁側）の橋台取付石垣は、薄桃色の和久羅山デイスait（通称大海崎石）が大半で打ち込み接ぎの築石であるが、その内に鱗紋（三角形）の刻印石が1個認められた。

北側（城山側）の橋台取付部石垣も同様に和久羅山デイスaitが大半で打ち込み接ぎの築石であるが、その内に、地紙形の中に一と刻んだ刻印石が1個認められた。

## (2) 遺物

### ① 陶製擬宝珠

宝珠最大径17.3cm、基底部径21.6cm、現存高32.3cm。宝珠の上部を欠く。宝珠と台部を接合し、接合部付近の内側は削って整形する。台部に4段の突帯を廻す。基底部付近に釘で木部に固定するための推定径8mmの円孔がある。外面全体に青地釉が分厚く掛かる。台部内面に2行にわたって「昭和十九年／本田□」と読めるヘラ書きの文字が認められる。□の上部は竹冠である。江戸時代は屋根の掛かった「御廊下橋」であったので、青銅製の擬宝珠は取り付けしていなかったものと思われる。明治時代に入りこの橋がそのままの形で維持されていたのか、屋根が取り壊されて普通の木橋になったのか定かではないが、昭和戦前の段階では青銅製の擬宝珠を取り付けた普通の木橋だったようである。

出土した陶製擬宝珠がいかなる事情の下、どこの窯で焼成されるに至ったのか、青い釉薬の発色が似ている袖師窯で聞いてみた。窯元の五代尾野友彦氏によれば、戦時下から昭和20年代にかけ、金属供出で取り外された市内の橋の擬宝珠や神社の高欄の代用品として、陶製の擬宝珠を製作焼成したという。昭和27年作の天神橋の擬宝珠は、径37cm、高さ64.8cmを測るもの。しかし、素地・釉薬や形状・寸法とも出土例と異なるという。後日、電話があり第4代目尾野晋也さんのお兄さんの話によれば、「当時、袖師窯と出雲市大津の萬祥山窯<sup>ばんしょうざん</sup>で手分けして焼いた。袖師窯では裏銘は刻まない。あったとしても尾野何某だろう。萬祥山窯に本田という人がいたのではないか。」という。

そこで、萬祥山焼窯元へ行き現当主の日野頸甫氏<sup>けいすけ</sup>に出土品を見ていただいたところ、素地や青地釉の

具合から萬祥山窯で焼いたものと判明した。刻字された「本田□」は、戦前から昭和52、3年頃まで50数年働いていた陶工の本田繁一氏で、出身は大津町の上津の宇那手であることが分かった。さらに日野氏所有のアルバムの中の古写真や新聞記事、メモから、松江大橋の代用擬宝珠を25個も製作したこと。出雲大社の大鳥居前にかかる宇賀橋や、本殿と神楽殿の間の橋、松江の城山周辺の橋の代用擬宝珠も作ったことが分かった。まさに戦争遺物とでもいうべきか。

他に、長さ6cm、吸口の径2×3mm、小口の径9mm弱を測る真鍮製煙管が出土した。木質の内側は3×4mmの範囲が空洞となる。江戸時代の通有のものである。

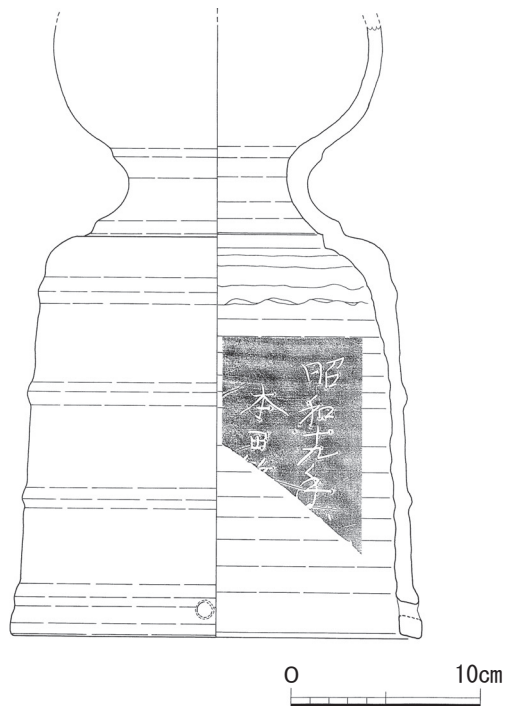


図11 陶製擬宝珠実測図



陶製擬宝珠

#### 4. 小結

- (1) 江戸時代末期の様子を描いたと思われる『松江亀田千鳥城図』によれば、御廊下橋の橋脚は2列、3本建てとして描かれているが、調査の結果では2列2本建てであり、両者は合致しない。胴木の間隔が約8.7mと長いので、中央部にもう1列あった可能性が高い。
- (2) 2本柱の橋脚は、絵図の示す江戸時代末期より古い段階のものと考えられる。
- (3) 千鳥橋架け替え工事に当たっては、絵図・文献史料や立会い調査の結果も検討されたが、
  - ① 江戸時代の御廊下橋に復元するには、屋根、壁などの資料的根拠が不足していることから、千鳥橋の形状は変えず、新材で改修する。
  - ② 橋脚は、江戸時代末期の様子を表した絵図に描かれている3本柱、2列とする。
  - ③ 擬宝珠は、正徳2年（1712）京橋改修時の絵図に記載される形状を踏襲し、鋳銅製とする。という方針で従来どおりの木橋として施工された。

## 注

- (1) 発掘調査は当時松江市生涯学習部文化課文化財係長の岡崎雄二郎が担当し、同係主事の寺本康が補助し、工事担当の松江市建設部土木課橋北道路係技師の土江幹雄が協力した。
- (2) 復元の基本方針②を参照。
- (3) 城郭研究者の検討では、陸軍省築城部本部が、昭和初期に刊行した『日本城郭史資料第32冊出雲・石見国』に登載されたものとする見解があるが、原図の確認に至ってはおらず、当初の作成年代については、不明である。  
本報告では、発掘調査当時の見解として、「松江城測量図」を明治時代初期の作成として論を進めた。
- (4) 石造りのアーチ橋に架け替えられた事由は、①明治になって管理が行き届かず崩壊の危険が生じた②明治26年に松江地方を襲った台風と洪水により崩壊した③明治35～36年にかけて行われた興雲閣建設に伴い非常に重たい建築部材を城内に運び入れる必要があった。と考えられるが、③の可能性が高いと考える。
- (5) 出土した陶磁器の編年観は、「九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－」（2000年2月、九州陶磁学会）に拠る。具体的には、公益財団法人松江市スポーツ振興財団埋蔵文化財課調査員の徳永桃代氏のご教示による。
- (6) 「史跡松江城公園周辺整備事業 北惣門橋復元工事概要」平成六年十一月松江市、松江市教育委員会、「史跡松江城公園周辺整備事業実施報告書」平成8年3月、島根県松江市、松江市教育委員会所収
- (7) 和歌山市文化体育振興事業団埋蔵文化財センター長の中野隆亮氏にお聞きしたところ、1982年11月に行われた調査で現橋脚部の南北両側で柱列痕と柱抜き跡が検出されたという。
- (8) 鳥取市教育委員会文化財課文化財専門員の坂田邦彦氏にお聞きしたところ、2011年度に調査した結果、近世の2時期（内1時期は幕末頃）、近代1時期（明治28～30年頃）の3時期に亘る橋脚が62本も検出された。幕末期の橋脚は3本7列、幅5.4（上面5.2）m、全長約35.46m（十八間）と考えられている。
- (9) 『御城内惣間数』天守の項で、「一、御天守高九丈四尺二寸 但六尺五寸／間二、拾四間三尺二寸」と記し、1間を6尺5寸に換算している。
- (10) 別名「大海崎石」と呼ばれ、これまで高山、和久羅山山塊に分布する安山岩とみなされていたが、最近の調査・研究では、今から500万年前に噴出した火山岩（溶岩）の一種で、安山岩より珪酸の量が多く流紋岩に近いものであることが分かった。タイプⅢに分類される赤褐色のディサイトは、松江城の石垣に多く使用されているものである。→佐藤大介、松本一郎、亀井淳志「島根県松江市、和久羅山ディサイトの岩石記載と全岩化学組成」（地質学雑誌第117巻第8号、2011年8月）所収

（おかざき ゆうじろう 松江城部会専門委員）